HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中央アジアの幸福度とコミュニティ ： アンディジャン州におけるマハッラの調査および計量分析から
Author(s)	土居, 海斗
Citation	日本中央アジア学会報, 19, 27-28
Issue Date	2023-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.19.27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94178
Type	journal article
File Information	JB19_002doi.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

日本中央アジア学会報　第19号（2023）pp. 27–28
DOI https://doi.org/10.14943/jacas.19.27

JACAS 年次大会 発表要旨

中央アジアの幸福度とコミュニティ
── アンディジャン州におけるマハッラの調査および計量分析から ──

土居　海斗

本報告の目的は、中央アジアにおける幸福度をコミュニティや社会関係資本などの社会的要因との関わりから検討するものであり、2019年9月に筆者が実施した現地調査および「移行国生活調査（Life in Transition Survey）」を用いた計量分析の結果を中心に報告した。

近年、幸福度や生活満足度といった主観的ウェルビーイングは暮らしの質を測る新たな指標として関心を集めている。旧ソ連圏および中東欧の移行経済諸国を対象とする研究では、移行国の幸福度は他国に比べてはるかに低く、主に経済的要因と強い相関を持つことが指摘されてきた。しかしながら、同じ旧ソ連圏の中でも中央アジア諸国については研究が手薄であり、同様の特徴を有するかについては議論の余地がある。例えば、世界幸福度報告書［Helliwell, Layard, Sachs, Neve, Aknin, Wang 2023］によると、幸福度の水準を決定する最も大きな要因は中央アジア以外の移行国では一人当たりGDPであるが、中央アジアでは社会的支援という傾向がみられる。すなわち、中央アジアの幸福度にとっては家族や隣人とのつながりや信頼感などの社会的状況が重要であることが示唆される。本報告では、社会関係資本が幸福度にもたらす効果を現地調査および計量分析から詳細に検証し、従来の移行幸福度研究に欠けていた中央アジアに特有な観点を補完することを目指す。

まず、現地調査はウズベキスタンのアンディジャン州に所在するオフトバチェク・マハッラにおいて実施し、計8世帯の世帯主を対象に聞き取り調査とアンケート調査を行った。マハッラとはウズベキスタンにおける地縁共同体であり、地域住民の慣習的な日常生活や結婚式などの人生儀礼が共有される場である［樋渡 2008］。そこで社会関係資本については、親－子世帯間および兄弟世帯間といった血縁関係と、マハッラの隣人や友人といった地縁関係に着目した。幸福度は、5段階および11段階で回答する特定の設問を用いた。

現地調査の結果として、幸福度が高い世帯は、総じて豊かな社会関係資本を有している（必要条件）ものの、社会関係資本が豊かであることは必ずしも高い幸福度につながる（十分条件）わけではないという発見を得た。社会関係資本が豊かであるとしても、親として子供や孫の人生儀礼の開催や家屋の所有状況、仕事や健康状態に対して悩みや不満を有している世帯の

©DOI Kaito 2023
(Licensed under CC BY 4.0)

幸福度は低かったのである。つまり、子供や孫の生活状況やライフステージに応じた人生儀礼の開催状況に対する親の満足感の違いによって、幸福度に差異が生じたと考えられる。なお、親から見た場合の子供や孫の生活満足度が争点であることから、ここでの満足度は子供や孫自身による生活満足度の評価や価値観と一致するとは限らない。以上から、社会関係資本が幸福度に正の効果を持つ際には、親の観点による子供や孫の生活満足度に問題はないという条件が少なくとも存在することが示唆された。

この条件がもたらされる背景についてはいくつかの解釈が可能である。第一に、利他主義の作用である。親は子供の生活状況が望ましいことによって幸福を感じるのである。第二に、相互協調的幸福観の作用である。親の幸福は子供の幸福に依存すると考えられる。第三に、子供や孫の誕生・成長に伴う親としてのオブリゲーションの増加である。親－子世帯間の社会関係資本が豊かであるがゆえに増大したオブリゲーションは、それらを十分に果たせなくなることで親の幸福度を下げる要因にもなり得るだろう。

続いて、計量分析では「移行国生活調査」のデータを用いて、トルクメニスタンを除く中央アジア4か国を対象にコミュニティレベルの信頼が生活満足度に与える効果を分析した。信頼変数は対人信頼（他者への信頼感）と制度的信頼（機関や組織への信頼感）である。また個人・世帯特性のコントロール変数と、国別ダミー、年別ダミー変数を導入した。さらに、内生性の問題に対処するために操作変数法を採用している。分析結果から、コミュニティレベルの対人信頼は生活満足度を高め、かつ、その効果はコミュニティレベルの制度的信頼の効果よりも大きいという結果が認められた。すなわち、中央アジアでは集合レベルの信頼が生活満足度に重要であることを示唆しているが、その効果は信頼の種類によって異なる可能性がある。

以上より、社会関係資本が幸福度に正の効果を持つ際には特定の条件が存在し、また、社会関係資本の種類によっても幸福度への影響は異なることが示された。今後の課題としては、聞き取り調査の対象を若者や他地域へと拡大することで、世代間および地域間の幸福観の相違を多角的に検証する必要がある。

参考文献

樋渡雅人 2008『慣習経済と市場・開発――ウズベキスタンの共同体にみる機能と構造――』東京：東京大学出版会。

Helliwell, J.F., Layard, R., Sachs, J.D., Neve, J., Aknin, L.B., & Wang, S. 2023. *World Happiness Report 2023*, New York: Sustainable Development Solutions.

（北海道大学大学院経済学院）